

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【3】萱津の渡し…萱津から中村へ■

1 木曾川の一之枝

萱津の渡しは、835年の太政官符に、木曾川、矢作川、安倍川等と並んで渡し舟を増強するという、次のような記述があります。

「尾張国草津渡 三艘

元一艘 今加二艘」(『類聚三代格』)

ところがこの記述には萱津ではなく「草津」とされているほか、①なぜ川の名前ではないのか、②他の川に比べて小さいのではな

いか、という指摘があります。名前については読み方が書き誤りされていますが、渡る川が庄内川だとすると、他に比べてやや小さいのかもしれませんが。

しかし、この渡しは当時は新川がなかったため、北から流入する五条川との合流点を渡るものでした。五条川は今日ではあまり大きくない流れですが、この川は木曾川の一之枝川とされ、当時は木曾川本流の一部が流れ込んでくる川だったようです(図1)。したがって庄内川との合流点も相当の川幅がある大河だったと考えられ、格が落ちるとか、川の名がないという疑問にも答えることができます。

今回は、この五条川と庄内川との合流点にあった萱津の渡しを、古代東海道がどう越えていったかを考えてみたいと思います。

2 大河を渡る

(1) 萱津の古代

萱津にはいくつかの古い伝説が残ります。その一つは日本武尊です。最後となった伊吹山の遠征では、日本書紀は、傷を負った武尊が帰路一度尾張の国に寄ったけれども、宮簀姫のもとには帰らず、伊勢の桑名に向かったとしています。その尾張の地は、当時海辺だ

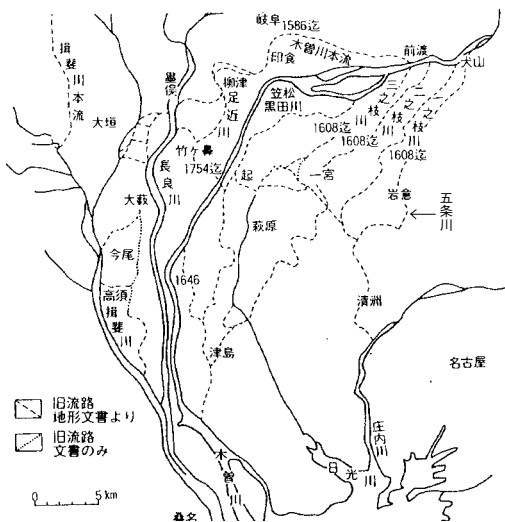


図1 木曾川の変遷。一之枝川が今の五条川に(文献③)

ったここ萱津とされているのです。またこの時、宮簀姫に逢えなかったことから、「阿波手(不遇)」の森とか浦という歌枕は、ここ萱津のことだとされています。付近の萱津神社には、その時、武尊が漬物に「藪二神物(香物)」と言ったという故事から、漬物の神もまつられています。

いま一つは2つの反魂香(はんごんこう)伝説です。反魂香とは漢の武帝が香の煙の中に死者を甦えらせたというものですが、萱津には七つ寺縁起や正法寺縁起の中にその話が伝わります。2つの話の内容は違いますが、共に780年頃この街道ですれ違い、反魂香を焚く事によって死者との対面を果たしたというものです(文献①)。これも不逢の森の故事と関係がありそうです。真偽はともかくとして、いずれも古代街道の悲しい物語として伝わることになりました。

(2) 幹線道路の合流点

当時の萱津は、川の合流点であると同時に街道の合流点にもなりました。8世紀末、都が奈良から京都に移ると共に、都から東国へは、古代東山道を通り関が原を越えて尾張に入るルートが出来たのです。このため萱津は従来の伊勢路経由の道と、北からの尾張国府を通る美濃路経由の道との合流点になりました。そして時代と共にその利用者は増え、中世の鎌倉街道へと引き継がれることになりました。11世紀の更級日記の主人公や古代も終わり頃ですが幼い義経や頼朝は、美濃路経由の道を通り、この萱津の渡しを越えたのです。

(3) 渡しと萱津の東

それでは、萱津の渡しは具体的にどこだったのでしょうか。五条川は今日では新川に合流していますが、当時は庄内川への合流でした。両河川の流路は、自然堤防の発達状況から考えるとおおむね今日の形態だったようです。渡しの位置は一般には合流部の下と考えられますが、明治の地図に見られるように、あるいは水路のようなものができていたのかもしれない。そう考えると、渡しは、現在の豊

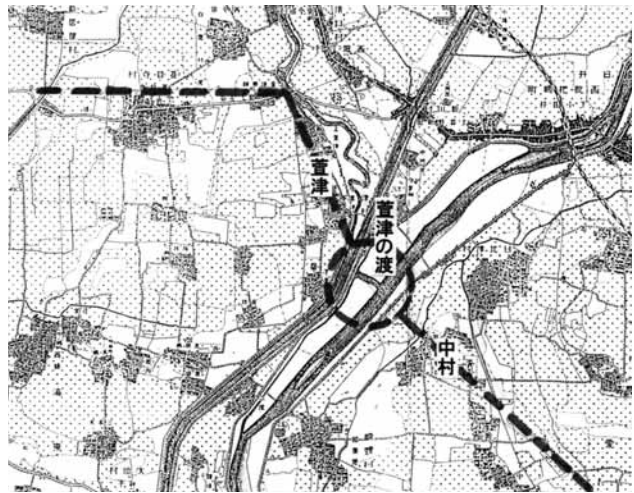


図2 明治の地図から想定する萱津の渡し

公橋付近からその上流500m位の範囲だったのではないのでしょうか。この位置は、次回紹介する直線道路跡の延長上ともいえる位置にもなるのです(図2)。

また、萱津には少し後の13世紀のことにはなりますが、「萱津の東宿」での当時の宿の賑わいを描いた有名な紀行文(『東関紀行』)があります。この東宿の位置は渡りの対岸部、今の名古屋市中村区とされ、現地には「東宿町」「宿跡町」という地名が付けられています。残念ながら度重なる洪水のためか、付近には街道の跡を示す古代の遺跡は見出されていません。が、宿跡町には「女郎塚」という塚の跡が伝承されるなど、ここにも古い街道の面影を探することができます。

3 紀行 渡し跡を追って

… 萱津から中村へ …

それでは、前回の甚目寺を東に来た萱津の北側から、中世の街道跡の残る萱津を通り、庄内川を渡って東宿跡へと歩いてみましょう。〈萱津の宿跡から〉

名鉄の須ヶ口駅を降りて西に進みます。少し行くと右に中世に創建された長谷院があります。ここで津島街道に入り、堤防に沿って道は五条川の法界門橋を渡ります。ここをまっすぐ西に進むと甚目寺です。

橋を渡って津島街道と別れ、左に堤防の上を進みます。すぐ右に「阿波手森」とした石碑



萱津の入口にある「阿波手森」の碑



日蓮高弟の開いた抄勝寺



古社・萱津神社

があります。ここから南が萱津です。中世には宿とされた所で、北から上・中・下と3つに分かれています。南に進むと右に萱津神社があります。古く、農業神・茅野姫をまつりました。神社の中に下り右側の奥に進むと、正面には初代は武尊手植えとされる榊の連理の枯木が、また右には漬物発祥の地をまつる香物殿があります。神社を出て右に下る道が鎌倉街道とされる道です。左側の川岸には反魂塚がありました。街道に入るとすぐ左がその香の伝説の伝わる正法寺で、奥には川岸から移設された反魂塚の碑が建っています。

南に進むと鎌倉時代を思わせる日蓮宗、時

宗などといった宗派の寺が続きます。また萱津には長者屋敷や牧という地名も残ります。長者屋敷は中世に宿が成立する前の貴族の宿泊場所とされる所で、牧は旅人の馬を帰路まで預かっておく所だったといひます。中世のこの付近を描いた富田荘図では、下萱津の実成寺の前に、渡しへの道ではなかったかとされる2本の線が描かれています。寺の前を、細くなった道を辿って五条川の堤防に上ります。この辺りが渡し口だったのでしょうか。堤防には今は巨大な清掃工場が出来ています。

右に曲り、五条川に沿って車の多い道を進みます。しばらく行った信号を左に進むと、五条川、新川、庄内川の渡しです。



望む 五条川の流れ。新川との合流部を



移設された反魂香塚

〈渡し跡から中村公園へ〉

3つの川を渡ると600^歩程になります。これは矢作川や安倍川とほぼ同じです。最後の豊公橋を渡ってすぐ左に曲り、堤防道路から庄内川の川原に降ります。上流に進むと、テニスコートの向こうにポツンと一つの白い標識が見えます。これが市の教育委員会が建てた「萱津の渡し」跡の標識です。やや北のような気もしますが、あるいは時代と共に変遷があったのかもしれませんが。

少し先に元の堤防道路に上る道があります。

萱津の渡しの標識。上段はそのむこうの水の流れ



女郎墓伝説地



明神社

信号で堤防道路を渡って反対側、東南に下ると JR の新幹線基地の下を潜ってバス通りです。この道は庄内用水の流れていた道です。右に道なりに用水跡を進み、右に中村高校を見て、幹線道路を越えます。そして宿跡町の 2 つ目の信号を右に、三本目を過ぎると右側に墓地があります。ここが女郎墓の伝説の残る所で、中央にそれらしい慰霊の石像がまつられています。元の信号の所に戻り、道路を渡って東に進みます。少し行くと左側に明神社があります。萱津の東宿の鎮守として鎌倉時代に創建されました。この辺りを萱津の渡しを越えた旅人が通過して行ったのでしょうか。

その東側はすぐ中村公園です。公園を横断して東側に行くと、豊臣秀吉の生誕地碑

や出生の史跡の残る常泉寺など秀吉出生の中村らしい史跡群があります。古代東海道はこの付近を斜め東南方向に通っていたようです。公園の正面に出て、参道をまっすぐ南に進むと大きな朱の鳥居が立つ、地下鉄の中村公園駅です。

4 自然堤防の地

萱津付近の地形を決めているのは「自然堤防」と呼ばれるものです。自然堤防とは、河川の洪水で流され、溢れた土砂が周囲に堆積した土地のことで、周辺からやや高い微高地を形成します。わずか50センチから3メートル位の高さですが、後背に低湿地ができるため、居住等に好都合な土地になりました。とりわけ木曾川などが作り出した自然堤防は大きく成長し、長い間に濃尾平野の河口部を網の目のように被うことになったのです(図3)。

街道は、この自然堤防の微高地を点々と伝いつつ進みました。萱津は木曾川の一之枝川である五条川が、中村は庄内川が形成した自然堤防上にありました。萱津の渡しは兩岸の自然堤防の間を渡るものであり、また古くはその河口部の津(港)としても大きな役割を果たしたところだったのです。

〈主な参考文献〉

- ①同編纂委員会「甚目寺町史」(1975、甚目寺町)
- ②同編纂委員会「新修名古屋市史 1、2」(1998、名古屋市)
- ③井関弘太郎『車窓の風景科学』(1994、名古屋鉄道 K K)

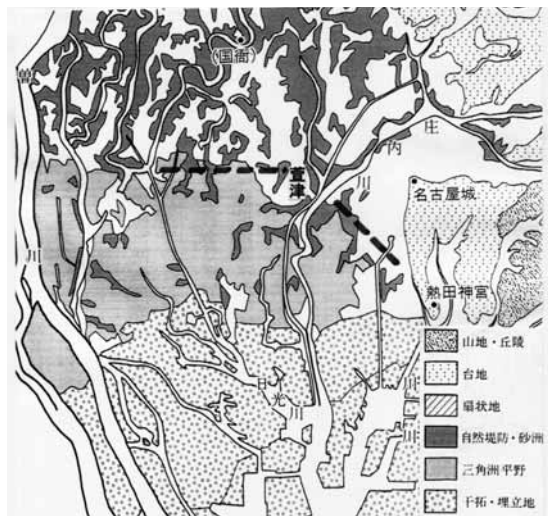


図3 自然堤防の目立つ濃尾平野の下流部(文献②)